

最終節後の優勝セレモニーで、トロフィーを掲げるノーム・カリュの和久井秀俊。
欧州5カ国目で初の栄冠を勝ち取った
Photo: Ohtuleht Sport

マイナーリーグ 見聞録

第4回 エストニアリーグ

有名リーグだけがサッカーか。現在FIFAには、209の国と地域が加盟している。が、誰もが話題にするリーグの数は、その1割がせいぜいだろう。残り9割、サッカー的に「辺境」と呼ばれる地に足を運び、マイナーの息吹とその喜びをお伝える、このページ。第4回は、国とともにサッカーも急成長のただ中にある、エストニアリーグの実情を探る。
取材・文・写真／長束恭行

Meistriliiga

・TALLINN
フローラ・タリン
ノーム・カリュ
レバディア・タリン
タリンナ・カレフ
・KURESSAARE
クレッサール
・NARVA
ナルバトランス
・SILLAMÄE
シッラマエ・カレフ
・PAIDE
バイデ・リンナメースコ
・TARTU
クルベネ
・VILJANDI
ビルヤンディ

TALLINN SILLAMÄE NARVA
PAIDE
KURESSAARE VILJANDI TARTU

リーグ創設は1992年。春秋制を採用しており、シーズンは3月～11月。
10クラブ総当たりの4回戦で計36節を行う。
最下位は自動降格となり、9位は2部の2位と入れ替え戦を戦う。
優勝チームは来季のCL予選2回戦、
2位と3位、国内カップ優勝チームはEL予選1回戦の出場権を獲得。

注目クラブ

Flora Tallinn フローラ・タリン
ホームタウン：タリン（約42万人）
スタジアム：ア・ル・コック・アレナ
（9692人）
監督：マルコ・レロフ（EST）

エストニア語とエストニア文学の教師だったアイバル・ボフラク氏が仲間とともに1990年に結成した、「エストニアのエストニア人によるクラブ」。リーグ優勝9回は同国最多を誇り、これまで多くの代表選手を輩出してきた。

Nõmme Kalju ノーム・カリュ
ホームタウン：タリン（約42万人）
スタジアム：カドリオルグ・スタジアム
（5000人）
監督：イゴール・プリンス（EST）

1922年から1年間のみ活動したクラブが1997年に復活。意欲的なクノ・テフバ氏がオーナーに就任した2002年以降成長を続け、積極的な補強も敢行。昨季はフローラの後塵を拝したが、今季は悲願の初優勝を達成した。

国際化・交流を後押し

IT×サッカーの 最先端がそこに

首都タリンにノートパソコンやスマートフォンを持参すれば、どこであろうと無料でWi-Fiに接続できる。エストニアは世界屈指のネット先進国であり、IT産業が盛んな国だ。インターネット電話のスカイプが生まれたのも、世界初の電子投票による議会選挙を実施したのも、実はこの国だったりする。

サッカークラブが公式ウェブサイトを構え、オンライン決済でのチケット販売が一般的になった今、ノーム・カリュはさらに一歩先を進

んでいる。Facebook公式ページの「イベント」で観客を募り、そこでファンは「参加」を表明。試合日に本拠地カドリオルグ・スタジアムのチケット販売所に行くところ、Facebookでのチケット予約者は専用の窓口から、一般チケットの半額（2.5ユーロ）で入場可能になるのだ。常日頃からソーシャルメディアで情報発信している和久井も、今季からFacebookにチーム向けの「グループ」を設けることで選手間の親睦を試み、それがムード作りに役立った、と話す。チーム内のエストニア人とロシア人の間に溝が生じやすい一方で、外国人選手が流入するグローバル化の中、民族間の壁を飛び越えたFacebookは有効（友好）な武器になっている。

人口130万の 小国が秘める、 大いなる可能性

エストニア独立回復後に発足し、今年で20周年を迎えた「メイストリリーグ」に新王者が誕生した。

■ 和久井も実感する将来性

首都タリンに本拠地を置くノーム・カリュ。8年前まで4部リーグを戦っていたクラブが、通算優勝回数1、2位のフローラ・タリンとレバディア・タリンに苦汁をなめさせたのだ。昨季、カリュ入団1年目にしてリーグ最優秀MFに選出され、2年目は初優勝の原動力になった和久井秀俊（29）は、偉業の秘密をこう語る。「昨季は2強相手にどう戦うか懸命に対策を練ったけど、今季はいかに自分たちのサッカーをやるかを重視しました。カリュはCL出場を目指し、それなりの予算で選手を集めています。2位に終わった昨季から多くの選手が残留したのは、金銭面だけが理由ではなく、クラブに野心が乗っかっているからこそ。組織力も躍進の要因でしょう」

エストニアは人口130万人あまりの小国だが、EURO2012予選プレーオフ進出を果たしたのは記憶に新しい。

「04年のEU加盟後、ユーロ導入で物価も安定し、国は格段に成長しています。サッカーのレベルも上がっていくのは間違いありません。協会は数年前からユース育成に予算を充てて国全体の底上げを図っていて、将来性があると感じています」



クレッサールのサポーターは、試合前にチームキャプテンから中世風の兜を引き継ぎ、それを被って応援するのが慣習だ



ノーム・カリュのサポーター「ローサド・バントリッド（ピンクパンサー）」。若くて健全なグループだが、応援は熱心だ



ボフラクは自然豊かなサーレマー島に住み、「森の住人」さながらの服装を好む。フラッターやプラティニとの面会でもこのスタイルを通して

■ 名物会長の考えにも変化が

そんなエストニアが抱える問題が、ソ連時代に流入し、今でも人口の3割を占める残留ロシア人の存在だ。国際化が進むサッカー界であっても、エストニア人がロシア人を敬遠する傾向は強い。例えば、エストニアサッカー協会現会長のアイバル・ボフラクは、1992年に新リーグからロシア人排除を試みたことがある。そのボフラクが1990年に創立し、長く会長を務めるフローラは、今でもエストニア人中心にチームを編成している。

また彼は、現役時代を過ごしたサーレマー島のクレッサールをフローラの傘下に置き、選手を貸与して強化を図っている。年金生活を迎えた晩年には「クレッサールの会長になってリーグ制覇をなし遂げる」そうだ。私が取材したタリンナ・カレフ戦では、37分にGKのトンネルで失点。それでも小さな応援団は勝利を信じ、「ドン・ド・ドドン、クレッ！」と声援を飛ばす。すると直後に追いつき、71分にFWクニンゲが押し込んで逆転勝利。愛息ベッセルも守備固めで出場し、TV解説に来ていたボフラクも喜色満面だった。

試合後、クレッサールのチーム関係者にボフラクを紹介してもらい、日本人がエストニアでプレーすることについて尋ねてみた。

「エストニアのサッカー文化にとっては、外国人選手よりも地元選手がプレーすることを個人的には好む。でも和久井は素晴らしいプレーでカリュに貢献しているね。レベルの高い日本人は歓迎するよ」

彼の主義主張にも、少し変化が表れているようだ。



スタジアムの背後に14世紀建造の城が望める。相手のタリンナ・カレフには満山浩之がプレーしている